

書評

坂井祐円 著

『お坊さんでスクールカウンセラー』

(法藏館, 2018)

心身教育研究所
土江正司

評者自身「お坊さんでスクールカウンセラー」なので、大変共感するところが多かった。むしろ、「お坊さんではないけどスクールカウンセラー」の方々が、本書からどのような印象を受けられるのか聞いてみたい気がする。

仏教者の立場からケースに向き合うということではなく、あくまでも一人のスクールカウンセラーとして活動する中で、仏教的な視点がケース理解に役立ち、その後の展開に少なからぬ影響が及んだケースが6つ紹介されている。またケースを通して、筆者自身の仏教理解が深まっていくのが感じられる。そのことで読者も一緒になって仏教の奥深いところの理解が深まるので、つつい内容に引き込まれる。

仏教の教義があって、そこにあらゆる悩み事が分類整理され、解答が出てくるというスタイルを取る高名な仏教者もいるが、筆者の場合はそうではない。教義も一つ概念に過ぎず、そこにとらわれていてはクライアントに寄り添うことはできないだろう。それは真の仏教者のありように通じるように思う。つまりカウンセラーであることが、逆説的にお坊さんの本来的なありようや如何に、と問いつけるのである。

6つのケースはすべて「死」が関係してい

る。第1章では死後の世界に興味を持つ女子生徒がクライアントである。誰もがときどき考えることではあるが、学校で教えられることはもちろんない。しかしこの女子生徒はなぜか知りたくてしょうがない。あるとき彼女は「ときどき、自分が生きていていいのかなって、思うんです」と、震える声でぼつりつつぶやく。「死ぬときには、きっと神さまが迎えにきてくれるんじゃないかって。変な願望があるんですよ。自分が居てもいい場所に連れていってくれるんじゃないかって」。

彼女とのやり取りに絡めて、中国の高僧善導の逸話が紹介されている。善導が、念仏すれば必ず浄土に生まれると説くやいなや、一人の聴衆が寺の外の木に登り、「南無阿弥陀仏」と称えながら身投げして死んでしまったのである。そんなに早まらなくてもと思うが、その人にとっては「救いは今ここにしかない」と感じられたのであろう。生きていることが辛くてしょうがない人にとって、浄土の教えは究極の救いである。だが、筆者がその教えをこの女子生徒に説くわけではない。代りに別な質問を投げかけることで、カウンセリングは意外な方向へ展開していく。

第3章は、別な生徒の自死に関わる緊急支援のときの話である。担任の先生が相談に見え、ホームルームのときに「みんな絶対に死なないでね。こんなことしちゃダメだよ。(略)いのちを粗末にしないで」と言ったら、一人の男子生徒が「あいつが死んだことって、悪いことなのか？」と言ったというのである。そして担任の先生はスクールカウンセラーに問う。

「先生はお坊さんでもあるんですよね。仏教では自殺をどう考えるものですか？」

筆者はかつて参加していた真宗カウンセリングの勉強会にて、主宰の西光義徹先生に自殺について質問し、「さるべき業縁のもようおせば、いかなるふるまいもすべし」という歎異抄の言葉をもらったことを思い出す。こ

こでも筆者は、その言葉を担任の先生に伝えるわけではなく、自分でも思いがけない提案をする。

第5章は「不登校と幽霊」という見出しである。評者も学校で幽霊に悩まされる子どもの話を聴くことがよくある。しかし悩みの本題は幽霊が見えること自体ではなくて、親子関係のことであったりするのだが、せっかく打ち明けてくれたのだから、親身に聴くことにしている。またその対応の仕方について、子どもから学べることも多い。

この章で幽霊を見るのは不登校の子の母親である。相談の初日に、「ここに来ようって決めた日だったんですけど、夜中に急に目が冷めて、変な感じがするなあって思ったら、ちょうど私の足元あたりに、お坊さんみたいな人が立っているのが見えたんです」と話し始める。怖い感じはなく、守護霊みたいな感じがしたという。筆者は「僕も一応お坊さんなんですよ」と打ち明けると、母親はとても驚くと同時に嬉しそうな顔をする。しかしこのケースは長引き、事故で急死した舅の幽霊にひどく悩まされたり、霊能者のアドバイスを受けて母親の気持ちに変化したりという展開をたどる。

カウンセラーと霊能者。クライアントにとっては「どちらが効くか」という比較の対象になるのかもしれないが、お坊さんでスクールカウンセラーである筆者は特に慌てることはない。霊能者のアドバイスに従っている母親をうまく支え、最後は舅の幽霊の意味も、息子の不登校の意味も解明されていく。

学校という子どもの「生」を育む場にあって、その片隅の相談室で「死」と向き合う。お坊さんでスクールカウンセラーだからできることなのかもしれない。筆者が本書を書くと思った理由は「学校が持つ、死をタブー視する空気に、ちょっとした風穴を開けてみたいという思いから」である。またもう一つの理由として「お坊さんでスクールカウンセラーの目から見た、仏教についての考察」を挙げている。

だが評者には、心理臨床に仏教的視点が大きな役割を果たす可能性に触れた本でもあると感じられる。やはり死に対する態度には、仏教者や他の伝統的な宗教者に一日の長がある。死から生を眺めることができると、生にどっしりとした落ち着きを与えられる。特に第2章に登場する白血病の看護学生のケースなどは、そのことを強く感じさせてくれた。